わたしの聖ジ・ハード戦

◎◎女性が働くということ◎◎ 58

医学ジャーナリスト・医学博士　植田美津江

涼しくて怖いお話

暑い季節を乗り越えるために、昔はよく怖い話に興じたものだ。話の展開に息を凝らし、何が登場するかわからないストーリーの流れに胸躍らせ、この世のものとは思われないおどろおどろしい存在に背筋が寒くなる瞬間は、確かに暑さを忘れる夏の風物詩であった。

今や、小説も映画も、季節に関係なくこの手のものが周期的に流行し、古典的なハナシが繰り返しテレビドラマになる。人々の「怖いものみたさ」をくすぐるテーマとして、怖い話は一定の人気を保っているようだ。

大学病院で働いていた若い頃、亡くなった方とともに「霊安室」でほぼ一晩過ごしたことがある。なぜ、そのような事態になったのか、細かいことは皆目記憶にないのだが、遠方から来る家族を待つために、死体のそばに誰かがしばらく付き添わなくてはならなかったような、そしてその時間が思いがけず延びたためだったような、そんなことだった気がする。とにかく、夜中に暗くて冷たい空気が満ちるその部屋で、死体と向き合うことになったのである。

私はまだ新人のナースであり、霊安室に入るのも初めてだった。思いがけず部屋が狭いこととホコリをかぶった安っぽいハスの造花が飾ってあるのが印象的だった。周囲は「怖くて嫌でしょうけど」という意味のことを口にした。でも私は何故かちっとも怖くなかったし嫌でもなかった。

しかし、何も起こらなかった。霊安室という名がついているだけで、それは単なる地下室に過ぎなかった。死体が生き返ってむっくり体を動かすとか、電気がチカチカ点滅したりとか、聞いたことのない音が聞こえるとか、その種の期待はいっさい裏切られ、ただただ静かで穏やかな時が流れるだけであった。

世の中には、霊感に強い人とそうではない人に大別されるという。

お線香の漂う部屋で、物言わぬ身となった仏さまを横目に、じっと座っているのは妙な気持ちだった。私は待っていた。「何か」が起こるのを。人が経験しない不思議なことが目の前で繰り広げられることを。

きっと私は後者なのだろう。俗にいう幽霊や背後霊などとはまったく縁がない。もし私が類まれな力を持つ前者であったなら、あのとき霊安室でたくさんの霊と出会えたかもしれないし、それこそ夏にふさわしい語り部となっていたかもしれない。だが、幸か不幸か、私はその点においては完全に「平凡」な人間であった。

そんな怖い話より、本当に恐ろしいのは生きている人間のほうだと人は言う。日々流れるニュースを見ていても、実際そのとおりである。人間の欲や憎しみや嫉妬や恨みや嘘に代表される底なし沼のようなこころの奥深さは、理解を超えているという意味で恐怖である。涼を求めてこの世のものでない現象を語る行為など他愛のないことなのだ。

くだんの霊安室で、ともにひとときを過ごした死者の家族はとうとう姿を見せなかった。何か事情があってのことだったのだろうが、そのとき感じた人間の「非情さ」も、絶え間なく起こっている日常の恐怖のひとつに違いない。

イラスト・三浦義雄